

33 事例から考察した透析室における看護師の役割

J A長野厚生連 篠ノ井総合病院

人工腎センター 同腎臓内科

北澤 香 塚野 倫子

田村 克彦 長沢 正樹

I はじめに

『老人が透析を導入するということは、老人にとっては、意識するにしろしないにしろ「死」を感じるできごとである』¹⁾と前田は述べている。このことから、透析を導入の上、癌と言われた高齢者の心理は計り知れないものがあると考ええる。

75歳を過ぎて透析を導入し、その翌年に肺癌と診断されたが、治療や継続診療を拒否していた患者に関わることにより、検査を受けようとする行動変容した患者の思いを分析し、透析室での看護師の役割について検討したので報告する。

II 方法

研究期間：平成21年9月～12月

面接方法：プライバシーが確保される面談室にて、看護師2名で質問項目に添い半構成的面接を行った。面談時間は、60分程度、面接で聞き取った内容を逐語録におこし、分析し、カテゴリー化した。

質問内容は、①透析導入時の思い、②肺癌と診断されたときの思い、③一人暮らしについて、④今心配なこと、⑤ゲルマニウムを飲んでいることについて、⑥再度肺癌と診断されたときの思い、⑦診断を中断した理由、⑧検査を受けようと思った理由の8項目とした。

対象の背景

81歳 女性、血液透析歴6年3ヶ月
病名は逆流性腎盂腎炎による慢性腎不全・肺癌、

平成14年3月血液透析を導入した。透析導入前より、妹の勧めでゲルマニウムを飲用していた。平成15年胸部レントゲンにて陰影を認め、肺癌疑いにてBF施行するが検査結果は、はっきりしなかった。呼吸器内科では経過観察となったが、平成16年から呼吸器内科受診を中断していた。

平成20年2月交通事故で搬送されたとき、再度肺癌を指摘され、精査勧められたが患者の同意が得られないため、以後経過観察中であった。

III 倫理的配慮

面接時に、研究の目的、方法、プライバシーの確保について説明し同意を得た。また面接中に面接を中止することが可能なこと、同意を得られない場合も治療や支援について影響しないことを説明した。

IV 結果

高齢で透析を導入せざるをえなかった患者の肺癌が見つかったから現在までの思いを分析した結果、「透析導入から初めて肺癌と診断された時」と「再度指摘された時」の2段階に分けることができた。

「透析導入から初めて肺癌と診断された時」の段階は、4つのカテゴリーと11のサブカテゴリーに分けることができた。「再度指摘された時」の段階は5つのカテゴリーと17のサブカテゴリーに分けることができた。

I 「透析導入から初めて肺癌と診断された時」の段階は、1. 腎臓が悪くなると坂道を転がるように悪くなると医師に言われ、何時かは透析になると心のどこかで思っていた。透析になっ

北澤 香 JA長野厚生連 篠ノ井総合病院

〒388-800 長野県長野市篠ノ井会 666-1

TEL: 026-292-2261

た時はしょうがないと思った。期待して高い薬を飲んだが効かなかったので、自分から透析を受けるといったという言葉から【現実を受け入れるよりしょうがない】とした。2. 透析も命はそう長くないという思いがあった。高齢でもあり、遠くまで通うのは大変、なるようにしかならない・・・という思いが心に浮かんだ。何処かには、「癌」という言葉は潜在的に潜んでいて表面には現れなかったと考えられることから【癌も透析も先はそう長くない】とした。(表1) I 透析導入から初めて肺癌と診断された時

(表1)

I 透析導入から初めて、肺癌と診断された時

カテゴリ	サブカテゴリ	返答の内容
現実を受け入れるよりしょうがない	腎臓の病気が悪化 治らない病気が受け入れるよりしょうがない。 期待した高い薬は腎臓に効かなかった。	・腎臓が悪化して腎臓内科に紹介された。いつかは透析かと思っていた。 ・透析になった時、しょうがないと思った。 ・高い薬を飲んでみたが効果がなかったので、自分から透析をうけます・・・と言った。
癌も透析も先はそう長くない	透析はどんな治療？ 自ら学習する。 肺癌も透析も先は同じ。	・透析をすることになって、講演会に出席したり透析室を見学したりした。 ・肺癌といわれたときに、「なるようになるわ」と思っていた。 ・肺癌でダメになるころには透析でもダメになると思っていた。 ・なるようにしかならないんだから・・・ ・OO病院に行くのが面倒だった ・それから呼吸器科とご縁がなかった

3. 医師から肺癌と言われたが、症状もなくはっきりした検査結果も出なかった。癌という実感はなく、ショックもなかったように感じた。妹夫婦に話しても重大感はなく、いつの間にか忘れたような気持ちになっていたことから、【癌という言葉に実感が持てない】とした。4. 検査結果がはっきりしていたり、ここで手術が出来たりしていたら、治療を受けたいというおもいがあったことから【病気は治したい】とした。

(表2)

(表2)

カテゴリ	サブカテゴリ	返答の内容
癌という言葉に実感が持てない	潜在的に潜む、癌への思い	・肺癌はどこかに意識はあったかも知れない。何かの折には思い出していかも知れないけど、そんなに気にならなかった。
	症状もない、結果も出ていない、癌という実感が持てない。	・2月に先生から肺癌といわれたときは気になった。 ・悪いところがあれば取らなければと思っていたが、自覚症状がなく、いつの間にか忘れていた
	癌の告知。ショックは無いように感じた。	・癌と言われてもそんなにショックではなかった。 ・少し良かったから。
病気は治したい	肉親の言葉は、決断を左右する。	・妹と義弟に相談したが、さほど重大だと考えていなかった。
	ここで治療ができるなら、治療は受けたい。	・なんだかはっきりわからなかったから、もしはっきりしていれば、手術を受けていた。 ・治療のことは心のどこかにあった。

II 「再度指摘された時」の段階、1. 一人暮らしであるが、自分ができるうちは自分のことは自分で行う。妹も近くにいて手伝ってくれるので安心、ボタンを押すと施設につながるようになっていたため安心であるという言葉から、【支えられて一人でも生活できる】とした。(表3)

II 「再度指摘された時」の段階 (表3)

II 再度、肺がんと指摘された時

カテゴリ	サブカテゴリ	返答の内容
支えられて、一人でも生きる	1人暮らし、自分のことは自分で行うしかない	・何でも自分でやらなければならないと思って動いているから。
	自分でできるうちは、がんばる。	・人にやってもらっていると思えなくなると思うが、がんばる。 ・自分で動けるうちは自分でやろうと思う。
	精一杯の努力、人に気兼ねはしない。	・自分でやれることを少しずつやっているもので汚くても平気、誰にでも気兼ねをしない。
	妹の存在は、安心につながる。	・妹が側にいてくれるから安心している。
いつでもつながる心のボタン	いつでもつながる心のボタン	・生活は建物の設備が良くできている。 ・ボタンを押すと施設に通じるようになっていて心配していない。

2. 年もとり、足も不自由になり、貧血もある。私の身体は病気の問屋。だんだんと体力が落ちていくのを実感するという言葉から【病気と年齢、体力の衰えを感じる】とした。3. 透析や肺癌はそう長くはないと言っているが、妹夫婦にゲルマニウムは、透析にも肺癌にも効くと言われ、ずっと続けて飲んでいることから、【少しでも良くなりたいたい】とした。(表4)

(表 4)

カテゴリー	サブカテゴリー	返 答 の 内 容
病氣と年齢、 体力の衰え を感じる	年齢と病氣、心配がないわけではない。	・足が不自由で転びそうになることがある。 ・心配なことは、貧血かな。
	私の身体は病氣の問題。	・腰が下がるのをこれ以上あげたら、眼が閉じなくなる。 ・もう病氣の問題みたいになっている
	再度、勧められた検査	・先生に手術は勧めないけど、PETだけでも受けたらどうかと言われた。
	体力が落ち、長く歩けない。	・PETの検査を勧められた時は、だるくて行けるかどうかわからなかった。 ・面倒くさいなあと思っていた。
少しでも良くなりたと思う	ゲルマニウムは癌にも効くという期待	・ゲルマニウムは癌も治るし、免疫にも効果があると言われ、「肺癌が治るならいいな」と思って飲んだ。 ・ゲルマニウムに頼っている。飲んでるから大丈夫と思っている

4. 遠くでの検査は身体がだるくて面倒くさいけれど、看護師皆に心配してもらっているという思いに心が動き、検査を受けてみようという思いになったことから【人の心が温かく、頑張ってみようという思いに心が動く】とした。5. 肺癌ではないかもしれないと言われたと話しているが、検査結果はクラスIII—bであった。前より肺癌は進んでいない、治療はしなくて良いという言葉が、肺癌でないかもしれないと心に残ったことから、【癌とは思いたくないという思い】とした。(表 5)

(表 5)

カテゴリー	サブカテゴリー	返 答 の 内 容
人の心が温かく 頑張ってみよう と心が動く。	前向きな決意は、体調をも変える。	・PETの検査を勧められた時は、だるくていけるかどうかわからなかったけれど、行ってみようと思うようになって身体の調子が少ししっかりした。
	心配してもらっているという思いに心が動く。	・師長さんの言葉が効いた。「皆が心配している」って言われたことが効いた。 ・こんな私のことを皆さんが心配してくれているんだって思って、ありがたかった。
	行動してみようと思った	・検査を受けてみようと思った。
	検査の結果は、「治療なし」と心に残る。	・気管支鏡でひっかかってくれれば…だったけど、何もひっかかってこなかった ・あんまり大きくなっていないみたい。 ・肺癌でないかもしれないと言われた(結果はクラスIIIb、腫瘍の大きさは変化なし) ・私は手術はしません…と言った。 ・手術はしない決めていたから。
癌とは思いたくないという心の動き	腫瘍はがんではないと思いたい。 手術はしないという心の葛藤。 医師からの説明	・(今回の検査結果)先生に肺癌があるとされた。

V 考察

この患者は、ゲルマニウムは腎臓に効かなかったことは分かっているが、癌と言われ手術や検査を拒否していてもゲルマニウムを継続して飲んでいるということは、少しでも効いてほしいという気持ち、可能性に賭けている思いが潜在しているのではないかと考える。その思いの裏には、透析や癌が悪くなっていくのではないかと不安が潜在しているのではないかと考える。私たちは現象に現れている言葉や行動のみから判断するのではなく、その奥に潜んでいる思いに気づいて対応していくことが大切であると考える。

『高齢者は自分の老いを実感している』『しばしば高齢者は、社会に無価値、役に立たないものとして生きていると考えられている。そのことが、彼ら自体をも無用、無価値な者と感じさせる原因にもなっている』²⁾と春木は述べている。この患者も、「こんな私のことを心配して・・・」といっていることから、同様の思いをしていると考える。こんな役に立たなくなった私に関心を持ってもらえたことにより、自分の存在が認められたことを実感でき、検査を受けてみようという行動変容したのではないかと考える。人に関心を持たれるという意識は、人を前向きな気持ちに変化させることができると考える。

患者の言動や行動から、癌と告知されても癌ではないと言われたと捉えているように、高齢者は重要なことを伝えられても時間の経過と共に自分に都合の良いように解釈してしまうことがあることが理解できた。透析室は入院でもなく、一般外来でもない、しかし外来でありその外来に生涯継続して治療のために週3回通院してくるという特殊な環境である。その環境において、限られた時間の中で患者のQOLを考えた支援を行うには、常に患者の全体像を把握し、計画的にチームで連携して関わっていくことが看護師の役割ではないかと実感した。

VI 結論

現象に現れている言動や行動のみで判断するのではなく、その奥に潜んでいる思いに気づき常に関心を持って関わること、また、患者の全体像を把握し、継続的に QOL を考慮した計画的な関わりが看護師の役割であると考えます。

VII 引用、参考文献

- 1) 前田貞亮 : 高齢者の透析
導入からフォローアップまで
日本メディカル 1995.
- 2) 春木繁一 : 透析患者の心とケア
メディカル出版 1999.
- 3) トラベルビー : 人間体人間の看護 医学書
院 2007.